

〈書評〉

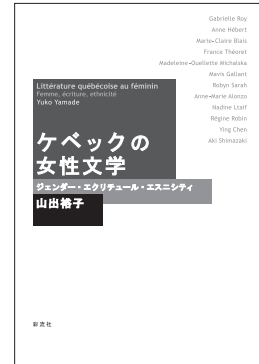
山出裕子著

『ケベックの女性文学』

——ジェンダー・エクリチュール・エスニシティ』

(彩流社 2009年 200頁 ISBN 978-4-7791-1433-5 2,200円+税)

小倉 和子



3億の英語話者が住む北米大陸の一角にある、770万人のフランス語話者が暮らす地域、それがケベック州である。中でもモントリオールはきわめてユニークな表情をもった都市である。歴史的にサンローラン通りを隔ててフランス系と英系が棲み分けてきたが、1980年代以降、カナダ政府が提唱する「多文化主義」に後押しされて、ヨーロッパだけでなく中東、北アフリカ、アジア、中南米などさまざまな地域からの移民を迎え、世界でもまれな多民族の共生状態を生み出している。しかもそれが、文化を創造していくうえで大きな活力になっているのである。

山出裕子氏の著書は、そうしたケベック社会の中で女性たちが辿ってきた道筋を、20世紀後半、とりわけ1960年代に始まる「静かな革命」から今日にいたるまでの歴史を辿りながら、文学作品を通して明らかにしようとしたものである。

本書の構成

全体は6章から構成され、第1章でケベックの女性文学とその背景が、「静かな革命」や「多文化主義」、女性誌の役割などとの関係から概観され、第2章では、ケベックの女性文学の起源に位置づけられるいくつかの作品の分析が行われる。さらに第3章では、フェミニスト文学や女性作家たちによる自伝的作品が紹介され、第4章では、フランス語圏におけるマイノリティの存在として、モントリオールの英系女性作家たちが取り上げられる。そして第5章と第6章では、1980年代以降顕著に増えてきた新移民の女性たちによる「越境文化」の形成状況が紹介され、具体的にアラブ系、ユダヤ系、中国系、日系の移民女性たちによる文学作品が分析される。以下、その内容をもう少し詳しくみていきたい。

第1章。周知のように、ケベックのフランス系社会は、伝統的にカトリック教会の勢力が強かったために、20世紀中葉にいたるまで、300年前とほとんど同じ価値観に支配されていた。カトリック教会は人々に農村に留まることを説き、女性にはよき妻、よき母であることを説いた。ところが、第2次世界大戦後、都市化が進むと、そのような社会構造が一気に崩壊することになる。1960年、ユニオン・ナショナル党に代わって自由党が政権につくと「静かな革命」が始まり、教育、経済、年金制度等、あらゆる面で改革が推し進められる。ケベック州政府の圧力の下、1969年にはフランス語もカナダの公用語となり、1971年にはトルドー政権が「多文化主義宣言」を行う。しかし、ケベック州自体は、英仏2言語を公用語とするだけでは、ケベック州で多数派を占めるフランス系の権利を守るには不十分だと、1977年に「フランス語憲章」を公布し、フランス語1言語主義を強化する。とはいえ、それは移

民を排除するものではなく、ケベックでも1980年代に入るとヴィジブル・マイノリティが急増してくる。そして、多様化に取り組むことがカナダの基本的姿勢であるとした1988年の「多文化主義法」により、それまで社会の外にいた女性やマイノリティの発言力が増し、21世紀にはいつてからは、とくに移民女性による文学作品が多数生み出されている。本章では以上のような流れが跡づけられるとともに、ケベックの近代化とほぼ同時に起こった女性運動において、『シャトレーヌ』をはじめとする女性誌が重要な役割を果たしたことが指摘される。

第2章では「静かな革命」以前に、いわば女性運動を精神的に先取りした作品として、次の3作が分析される。すなわち、モントリオールを舞台にし、フランス系住人が置かれた厳しい状況をあえて露呈することによって、英系社会からの脱却の必要性を示唆したガブリエル・ロワの『かりそめの幸福』（1945年）、夫からの解放を求める主人公を描いたアンヌ・エペールの『閉ざされた部屋』（1958年）、そして顔の美醜に着目するマリ＝クレール・ブレの『美しき獣』（1959年）である。いずれも20世紀のケベック文学を代表する女性作家によって書かれた代表作であるが、小説世界では、多分に象徴的に描かれているとはいえ、文化革命が先取りされていたという指摘は興味深い。

第3章。1970年代に入ると、女性作家たちはフェミニズム運動の影響を強く受けながら書くようになる。ケベックの女性文学は、「書く」ことや「語る」ことによって解放をめざすフランスのフェミニズムとアメリカのラディカル・フェミニズムの両方から影響を受けながら、「肥沃な三角州地帯^{トライアングル}」で発展した点が特徴的である。また、自伝的作品に見るべきものが多いのもこの時代の特徴で、女性作家たちは「私的」なことを「社会的」なものにするため、あるいは「他者性」を見出すためにさかんに自らの過去や身体について語ろうとする。そのような観点から、ニコル・ブロサールの『日記』や、フランス・テオレの『記憶のための日記』、マドレーヌ・ウエレット＝ミカルスカの『語りたいた誘惑』などが考察される。

第4章ではケベックのマイノリティ文学として英系モントリオール文学が取り上げられる。著者はルダンらとともに、多くの民族集団がカナダ社会の中心に進出するようになっているにもかかわらず、ケベックの英系だけは「忘れられた」存在だと指摘する。故意に無視されている、とはいわぬまでも、あえて言及するのがはばかれる存在、ということだろうか？ しかし、フランス語1言語主義をとるケベック州の中で、モントリオールは特異なバイリンガル都市であり、仏・英の共存が豊かな文化を創造しているのも事実である。その例として、両親から英、独、ルーマニアの血を引いてモントリオールに生まれ、言語を通して自らのアイデンティティを確立しようとするマビス・ギャラントや、ニューヨーク生まれ、モントリオール育ちで、両文化の共存の重要性を説くロビン・サラの作品が紹介される。

第5章。さて、本研究の最大の目的は、最後の2章で、現在ケベックで活躍する移民女性たちの文学作品を取り上げることにあったのではないだろうか。そのためにこれまで、ケベック社会の歴史を辿り、時代を追いながらさまざまな女性のエクリチュールを振り返ってきたといっても過言ではあるまい。本章で取り上げられるのは、アラブ系のアンヌ＝マリ・アロンゾ（1951年エジプト生まれ、ドイツ、フランス滞在を経て、1963年ケベックに移民、2005年没）やナディーン・ルタイフ（1961年エジプト生ま

れのレバノン人、1980年よりモントリオール在住)、そしてユダヤ系のレジヌ・ロバン (1939年生まれ、フランスで教育を受けたユダヤ人、1977年モントリオールに移住) である。アロンゾは、ケベック到着直後からフランス語を解したが、自分が知っていたフランス語とケベックで話されるそれとの間にずれがあることを知り、その違和感をテーマにする。また、彼女は交通事故で身体を失ったため、いわばそれを取り戻す方法として「書く」ことになる。ルタイフは代表詩集『河の間で』において、ナイル川とセントローレンス河の間で押し流される自己のイメージを綴る。さらに、作家であると同時に社会学者であるロバンは、常に「他者」として「外側」の空間を探しながら、ユダヤ文化とケベック文化の狭間で、ノマドのアイデンティティ形成のために「書く」。彼女の伝記的フィクション『石ころたちの途方もない疲れ』に現れる母娘は、2人が別々にさまざまな場所と言語を経験した後モントリオールで再会し、この町の曖昧さを心地よく感じる。

続く最終章で取り上げられるのは、アジア系移民の女性作家、中でも、中国系のイン・チェン (1961年上海生まれ、1989年よりモントリオール留学) と日系のアキ・シマザキ (1954年岐阜生まれ、1981年カナダに移住、1991年よりモントリオール在住) である。イン・チェンは、『水の思い出』や『中国人の手紙』などの作品を通して、自国とケベックの間で文化翻訳を行いながら、女性の抑圧と解放のテーマを探究する。一方、2005年に『ホタル』でカナダの最高の文学賞である総督賞を受賞した日系のアキ・シマザキは、ヨーロッパ人からみたエキゾチシズムの日本を拒否し、あえて人間の裏切りや家庭崩壊などの現実を題材として取り上げる。とりわけ、5部作の3冊目『ツバメ』では、それまで孤児ということになっていたカナザワ・マリコが在日であったことが明らかにされる。シマザキはいわば、日本においては書くことが難しかったテーマに、ケベックという地で、フランス語で挑戦し、外からの視線で日本を眺めることによって、日本社会に潜む問題をフランス語読者に知らしめる。

本書の意義と課題

以上、山出氏の研究を概観してきた。日本でも、ケベックの歴史・社会・文学に関する研究は年々増え続けている¹。しかし、著者もいうように、ケベック女性や彼女たちの文学に限定して掘り下げたものはまだほとんどない。ケベックは女性作家の割合が高いのも特徴の1つだが、そのような点からも、本研究の意義はたいへん大きい。女性に着目することで見えてくるのは、なにも女性だけに限らない。そこには、男女平等の問題はもちろんのこと、仏・英の共存やエスニックとの文化的混淆など、さまざまな問題が関わっている。つまり、女性のエクリチュールを考察することは、人間どうしの共存のモデルを考えることと不可分なのである。中でもモントリオールという、バイリンガルで移民が集中する大都市は、そのことを考えるのに絶好の場所といわざるをえないだろう。多様性が生み出す活力をつぶさに観察した本書には、日本や諸外国の将来の社会にとっても多くのヒントが隠されているはずである。

ただ、最後の2章で扱われた作家たちに関していえば、彼女たちの作品の魅力は、女性や移民のエクリチュールという枠をはるかに超えるものであるようにも思われる。自らの言葉を発する手段をもつことと、その人間の地位とは密接な関係がある。言葉をもたない者、もてない者、発する方法のない者が、表現の自由を保障された場所にきて発言し、そのことによって自らも変わり、社会も変革していくということは大いにありうる。しかし、移民が書けばいつでもマイグランド文学になるわけではないように、

女性を書けばいつでも女性文学というわけでもない。たとえば、アキ・シマザキは、自身の女性としての異文化体験を直接小説に盛り込むことはない。彼女の魅力の一部は、女性性を超えた人間理解のために構築された、きわめて完成度の高い独自の小説世界にあるのではないだろうか。山出氏の研究は、ケベック社会や「移民」、「女性」というテーマを設定したために、逆に、そうした女性作家たちが扱う「女性」を超えた人類の普遍的テーマの読み込みという点ではやや禁欲的にならざるをえなかったように思える。とはいえ、北米大陸におけるケベックの特異性や、モントリオールという都市の文化的混淆によるダイナミズムが十二分に伝わってくる、これまでに類を見ない好著であり、英・仏両言語による既存の研究もよく踏まえたうえでのこの研究は、昨秋、日本ケベック学会を発足させた日本のケベック研究にも大きく貢献するものである点を強調したい。

(おぐら・かずこ/立教大学異文化コミュニケーション学部教授)

注

- 1 長部重康・西本晃二・樋口陽一編著『現代ケベック——北米のフランス系文化』勁草書房、1989年。日本カナダ学会編『史料が語るカナダ』有斐閣、1997年。小畑精和『ケベック文学研究』御茶の水書房、2003年。真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学』彩流社、2006年、など。